

# 生 *Seikatsu Bunkashi* 史

## 生活文化史

<史料館だより>

### 目 次

- ◇本庄村史（仮称）の編纂状況について……………大国正美 2
- ◇トライやる・ウィークと史料館  
— 本庄中学校の生徒を受け入れて —……………道谷 卓・水口千里 4
- ◇展示品との対話（十）  
手洗いタンク……………水口千里 6
- ◇大日靈女神社の社殿が復興……………道谷 卓 7
- ◇史料館日誌抄・資料寄贈者ご芳名…………… 8

2001.3.31  
NO.28

（新着資料）子供用スケート▶  
昨年、大流行したキックボード  
の前身？  
昭和初期から昭和30年代にかけ  
て、子供の遊び道具として使われ  
ました。



神戸深江生活文化史料館

# 本庄村史（仮称）の 編纂状況について

史料館副館長 大 国 正 美

史料館が長らく取り組んでいる本庄村史（仮称）の編纂が、年度内刊行に向け、大詰めを迎えている。現状と形の見え始めた村史の内容を紹介したい。

## 編纂のねらいと現状

本庄村は一八八九年（明治二十二）に、市制町村制の施行に伴って、深江・青木・西青木の三カ村が合併してできた村である。一九五〇年（昭和二十五）、御影町、魚崎町、住吉村、本山村とともに神戸市と合併し、東灘区となった。このとき合併した四カ町村はそれぞれ史誌を編纂しているが、本庄村だけが未刊に終わっている。地域の熱意のもとに、一九八〇年から編纂が続けられて来た。

編纂の目的から、深江・青木・西青木地区の歴史の叙述が主眼であるが、森稲荷神社の御旅所が深江にあるなど、三カ村だけでは地域社会の歩みは語れない。また江戸時代以前に用いられた本庄は九カ村あり、ほかに森・田辺・小路・北畑・中野（以上東灘区）、三条・津知（以上芦屋市）の村々も本庄に含まれている。こうした地域の広がりを意識しながら編纂を心掛けた。従来の自治体史が現時点の市境だけを記述の範囲にしている事例が多く、これでは時代とともに変化する地域のまとまりは明らかにできないからである。

内容は専門的な内容を、できるだけ平易に市民の読者を想定して編集を試みた。ルビや学術用語の解説欄を設ける一方、一層踏み込んで内容を知りたい人のために、参考文献を充実させた。また組み

立ては地理編、歴史編、民俗編の3編構成とした。3つの分野を併せて、初めてこの地域の多様な歩みが明らかになるからである。

## 各編の内容

地理編は自然地理と人文地理に分け、自然地理はどのように大地が出来上がってきたのかを主眼に、地質などを詳述している。また阪神淡路大震災から学ぼうと、特に災害と地質との関係にも着目し、被災家屋と地質と関係を調査し、内容に盛り込んだ。人文地理は、古地図と地形図をフルに使って、河川流路の変遷と土地利用の変遷を詳細に追った。特に明治以降に発行された地形図を集大成して描いた地域の変化は圧巻である。地図も豊富に掲載して、地域の変貌を目で見ることを試みた。

歴史編は、考古学、古代、中世、近世、近代、建築編に大きく分けた。考古学は東神戸から芦屋市に至る現時点で知られる様々な遺跡・発掘調査を網羅し、この地域の考古学分野からの叙述の決定版とも言える内容である。特に震災復興では他府県から職員の応援を得て爆発的な件数の発掘調査が行われ、これらのデータを逐一追っている。また近年、中世・近世時代の発掘調査が進んでいることから、従来のような古い時代だけでなく、歴史時代の発掘調査による成果にも言及している。

古代は、主に西摂地域にまで視野を広げて描いている。いわゆる西摂地域は、畿内の西端にあり、畿内の「ウチとソト」の境界である。こうした視点から、海上交通と関係の深い本住神社やこの地域に住んだ豪族の分析を通じ、古代国家にとってこの地域が政治・外交・宗教上で重要な地位を占めていたことを明らかにする。

中世は、京都から西国への通過点だけに、源平の合戦、「太平記」の世界、戦国の動乱など、血なまぐさい戦いに巻き込まれた。中世史料は出尽くしていると思われるが、新たに公家の日記に新史

料があることも判明。これらも交え戦乱の中でたくましく生きた人々を描く。またこの時代は芦屋や西宮社家郷と再三、山境争いをしたことから明らかのように、本庄という地域が形成される時代である。いふなれば現代の始源が作り始められる時代の、地域の変化を史料の行間を読むように追う。

近世になると、再三の災害にもかかわらず、深江村の庄屋や大庄屋を務めた永井家文書・酒造家の永田家文書・医師の深山家文書など地元の村方史料のほか、周辺の地域にも少なからず残っている。これらの史料により、村落社会の中での地域の営みを、幕藩体制の支配、商品経済の発展、山野の利用、体制の動揺と地域の変貌、幕末維新の状況などに分けて描く。特に水利権や山の境界をめぐる争いなどは、詳細な史料が残っており、農業を基盤として生活を発展させてきた地域の事情を浮き彫りにする。

近代は明治と大正・昭和期に大きく分け、明治維新による変化、身分の解体と新しい村運営の始まり、連合町村制から自治制度の施行による本庄村の誕生以降の動き、武庫郡との関係などを叙述する。大正・昭和期は、新聞記事や各種の統計資料、また旧東灘区役所文書などをもとに、急速な人口増加と商工業の発展によって、地域が都市化し生活が大きく変化する歩みをたどる。また川西航空機の工場が誘致されたことで、重点的な空襲被害を被るなど、第二次世界大戦と本庄村は他の村以上に深い関係があった。このため、戦災は生活史を考えるうえで重要と位置付けた。合併による本庄村の消滅までを叙述の一応の区切りとしたが、神戸商船大学の前身の設置から大学昇格など、地域と切り離すことのできないものは、合併後の部分も折り込んだ。

また大正期を中心に芦屋から深江にかけ、洋館が相次いで建築され深江文化村と称されたが、現在は三軒が残るだけで、景観は大き

く変わった。しかもまとまった記録はほとんどない。このため建築学的な見地から本格的な調査を行い、文化村の様相を記録した。

民俗編は、日常生活、主要一次産業である漁業、祭礼、信仰、石造遺物、史跡、史料館蔵民具の概観で構成する。日常生活は、衣食住、婚礼・産育、葬礼、交通・交易の各テーマ。聞き取りによる大正・昭和の町並みの復元なども試みた。漁業については、この地域の特徴として最も力点を置いたテーマのひとつで、詳細な聞き取りを生かしてビジュアルに漁法などを復元した。一九七二年（昭和四十七）、埋め立てによる漁協の解散と漁業の終焉は、半農半漁のこの地域の性格を根本的に変えてしまった。今は漁業に従事した人たちからの聞き取りが可能で、記録できたことは極めて意味がある。

その一方、農業については直接従事した体験者を捜し出せず、記述を断念した。またこの地域は再三災害に見舞われ記録が乏しいだけに、石造遺物は、地域の足跡を記した重要な遺産である。震災以前から悉皆調査を行っているが、震災復興の過程で行方不明になったものも多い。また多少の重複を承知で史跡の章を設けた。これは変化の激しい地域であるにもかかわらず、街角にはまだまだ歴史を語る生き証人が数多く存在することを知らず、街角にはまだまだ歴史を語る。最後に史料館の歩みと史料館の収蔵資料の大概を載せた。

震災で蓄積した聞き取り資料の一部が紛失、せつかくの聞き取りが叙述に生かせない部分が生じたが、震災により地質、考古学の分野では新たなデータが加わった。また史跡などでは震災前と現状との比較も試みた。歴史を記述するとともに、現代の記録としても意味を持たせることを試みた。

震災で作業が中断、一時は刊行自体が危ぶまれたが、関係者の熱意でようやく発刊の見通しが立ってきた。多くの犠牲への鎮魂の祈りも込め、最後の作業を急ぎたい。

## トライやる・ウィークと史料館

— 本庄中学校の生徒を受け入れて —

史料館研究員 道 谷 卓  
史料館研究員 水 口 千 里

平成一二年も昨年同様、「トライやるウィーク」が実施され、史料館でも本庄中学校二年生の二人の生徒を受け入れることになった。期間は六月五日（月）から九日（金）までの五日間で、そのうち史料館では六日（火）と九日（金）の二日間を受け入れることにした。そこで、本稿において、史料館でのトライやるウィークの二日間の活動を報告することにする。

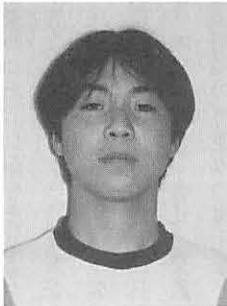
今回、史料館の業務を体験することになった生徒は、石田順君と新川雄太君の二人で、二人とも歴史は少し苦手とのことだが、二日間とも熱心に取り組んでくれた。

それでは、二日間のタイムスケジュールと二人の奮闘ぶりを紹介することにしよう。まず、初日（六日）は、道谷研究員の指導のもと、史料館の活動の理解や本庄地域の歴史を学んでもらうことを主眼に置いて、館の通常業務を体験してもらった。そして、二日目（九日）は、水口研究員の指導のもと、館蔵品、特に民具の整理作業の実習を行うことで、史料館の資料に親しんでもらうことにした。

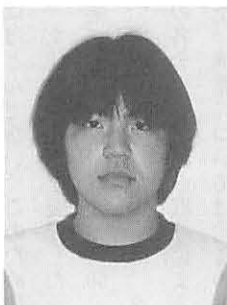
初日、二人は九時に来館、史料館の概要と二日間の予定を説明し、館の通常業務についてのガイダンスを行った。受け入れの二日とも残念ながら開館日ではないため見学者がいないので、見学者の応対についても数多くあるため、今回のトライやるウィークではそちらの方を

体験してもらった。一通りのガイダンスの後、本庄地域の歴史を理解してもらうことも兼ねて、史料館周辺の史跡調査に出かけた。これは史料館の活動の一つである調査研究という分野を体験してもらいたかったからでもある。二人には、デジタルカメラと史跡調査票、地図、巻き尺などを持ってもらい、魚屋道の碑、正寿寺、大日靈女神社、踊松地蔵、踊松の碑、西国浜街道名残の松、本庄村役場跡をまわって、それぞれの史跡をデジタルカメラで撮影、石標などの大きさの計測と銘の書取り、地図上での確認という作業を行ってもらった。そして、各地点では史跡の解説をして、地域の歴史の理解を深めてもらうように努めた。二人とも、近くに住んでこれらの地点を何度も通ったことはあるとのことだが、各史跡のことは初めてらしく、興味深く話を聞いてくれていた。そして、史料館に戻ってから、調査した内容をパソコンの調査票に入力し、それをプリントアウトするという作業も実践してもらった。

午後からは、展示資料の収納作業、展示室・収蔵庫の点検作業という、一見地味ではあるが、実は館の運営には重要な業務を体験してもらったのである。当日は、ちょうど季節展示の五月人形を収蔵庫に収納することになっていたので、二人には実際に五月人形の資料に触れてもらい、資料の取り扱いの方法を学んでもらった。ふたりとも、最初は資料を壊さないかとおそろおそろ触っていたようであったが、しばらくすると手つきも慣れて、資料に親しんでいたよ



石田 順君



新川雄太君

うに感じられた。それが終わると、収蔵庫の整理作業を行ったが、この作業は、重い荷物の持ち運びが多く、二人はかなりしんどそうであったが、最後までへばることなくがんばってくれた。

二日目は、いよいよ収蔵資料の整理作業にチャレンジである。新着資料として受け入れたばかりの唐箕を対象として、収蔵資料の整理、保存管理の作業の手順を学んでもらうことにした。

唐箕とは、刈り取った稲を脱穀したあと、風力を利用して十分に実って重量のある籾と、軽い藁片や籾殻などをより分ける道具だが、二人にとっては、もちろんはじめて見る道具である。そこで、まず唐箕が何かを知るために、文献資料で構造や使用方法を簡単に勉強した。実際に資料が目の前にあるので、二人とも、唐箕がどんな道具で、どんな動きで働くのかすぐ理解してくれたようだった。

次は、資料の洗浄、清掃である。外部に付着した埃などは、そのまま放置すると資料が痛む原因になる。また、民具は、一見丈夫そうに見えるが、木、竹、藁など自然素材を多用しているので、水気や乾燥にとっても敏感である。大切な文化財であることを常に頭において丁寧に清掃しなければならない。また、古い埃、ゴミ、カビには雑菌が含まれているので、マスクと軍手を着用するなど、衛生面での注意も必要である。まず、内部のごみを取ったあと、ブラシを用いて埃を丁寧に落とし、固く絞った雑巾で水拭きする。二人の丁寧な清掃作業は、約三〇分ほどかけて完了した。

資料の清掃が終わわり、少し休憩を取ったあとは、資料カードの作成である。資料カードとは、収蔵資料一点につき一枚作成するもので、そこには資料の名称、分類番号、整理番号、収蔵年月日、受け入れ先、使用地、使用方法、材質、保管場所など、資料についてのデータをすべて記載する。写真や寸法などを記入した図面も付加されることが多い。二人には、その一連の作業を体験してもらった。

まず、資料カードに、名称、分類番号、資料番号、受け入れ先など現時点でわかる情報を記入する。つぎにデジタルカメラで、写真撮影をおこなう。資料の形状がわかるように撮影角度に注意し、唐箕の正面から一枚、側面から一枚それぞれ撮影した。撮影したデータをパソコンにとりこみ印刷し、資料カードに貼りこんだ。

計測は、本格的な実測は難しいので、巻き尺を使用して略測図を作成した。水平に計測しなければ誤差が出るので、ふたりでお互いの計測値をチェックし合いながら作業を続けた。二人の計測誤差が数センチあることもあり、この作業は想像していた以上に大変だったようである。完成した略測図を資料カードに貼って完成である。

二日間史料館で体験した作業の中には、二人にとって、想像を越えたものもあったと思う。終わったあとの感想を聞くと、史料館の館員の仕事に対してこれまでとは違った認識ができたように感じた。二人が作成してくれた調査表や資料カードの、原本は体験の成果として持ち帰ってもらったが、コピーは館で所蔵している。二人の体験の成果は、館の大切なデータとして活用させていただくつもりである。



資料の清掃



資料カードの作成

## 展示品との対話(十)

## 手洗いタンク

史料館研究員 水口千里

この資料は、篠山市の日常雑貨店で購入したもので、材質はポリプロピレンである。ホーロー製なら年配の人には懐かしい道具かもしれない。縁側の端にある汲み取り式の便所の戸の脇に、和手拭といっしょに吊り下げられている様子が目に浮かぶ人も多いだろう。

使い方は至って簡単。上部のタンクに水を入れておいて、下の蛇口部分に手のひらをあて、押し上げると適当な量の水が流れ落ちてくるので、それで手洗いをする。手のひらを除けばストッパーが働いて水は落ちてこない。簡便なだけに人間の知恵をより強く感じる用具である。もともと用を足したあとの手洗いは、手水鉢や手桶の中の水を柄杓ですくっておこなったが、木の葉やゴミがいつも浮かんでいるので、この手洗い器のほうがはるかに衛生的だ。

ところで、この手洗い器、見たこともあるし使い方も知っているが、意外にも正式な名前がわからない。資料に「手洗いタンク」と製品名がシールで貼ってあるものどもピンとこない。日常的に使用していた年配の方々に聞いても、みなさん「はて、なんだっただろう」と首をかしげるばかりである。

そこで、あれこれ本をあたったり、いろいろな人に聞いて名前探しをすることになった。しばらくやみくもに聞きまわっていると、ある単語にぶつかった。それは「手水」ということばである。手水とは、もともと手や顔を洗う水をさす。神社で参拝前に手や口を洗い清める手水鉢がもともわかりやすい例であろう。便所の横にあつ

た手洗い用の木製や石製の容器もまた手水鉢と呼ぶ。そこから、この吊り下げ式の手洗い器も手水と呼ばれるようになったようである。吊り下げて使う手水で「吊り手水」と呼ばれることもあった。なるほど、この名前のほうが、手洗いタンクよりはるかにしっくりくる。アイディア商品だったはずの吊り手水も、下水道の普及にともない私たちの生活から姿を消す。今ではほとんど需要がなく、生産打ち切りも間近だと言われている。電気、ガス、水道などが津々浦々まで行き渡ることによって、吊り手水だけでなく、古くからの人々の生活の知恵が生み出した道具が少しずつ消失しつつある。それは、一抹の寂しさを感じる現象でもある。

しかし、この吊り手水が一時期活躍したことがあった。それは、あの阪神大震災である。長い断水の時期に、ひねれば水が出る水道の蛇口を連想させるこの吊り手水が重宝されたのは想像に難くない。もし吊り手水がまた必要とされるのが、あのような悲惨な状況のもとでしかないなら、史料館の片隅にいつまでもぶら下がったままでいてほしいと願うばかりである。



手洗いタンク(当館蔵) ▶

銅製の手洗いタンク  
(藤川祐作氏蔵) ◀

# 大日靈女神社の社殿が復興

史料館研究員 道谷 卓

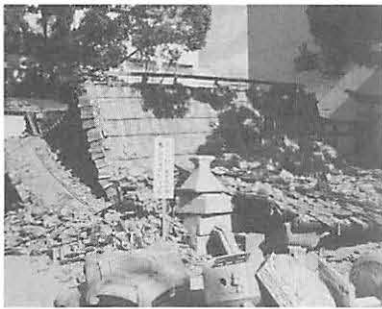
平成一二年（二〇〇〇）一月二三日、阪神・淡路大震災で倒壊した、深江の氏神、大日靈女神社の社殿が新築再建され、完成を祝う竣工奉祝祭と奉祝式典が行われた。

大日靈女神社は、地元では「大日ツァン」「大日神社」と親しみを込めて呼ばれ、社伝では、文明一三年（一四八一）に、深江の大日如来を本尊とする薬王寺が一向宗に改宗し本尊を阿弥陀如来に変えてしまったことから、もとの本尊の大日如来を祀る場所がなくなり、村人が大日如来を祀ったのが神社の始まりと言われている。

平成七年（一九九五）一月一七日午前五時四六分に発生した阪神・淡路大震災で、明治四二年（一九〇八）に建てられた社殿が完全



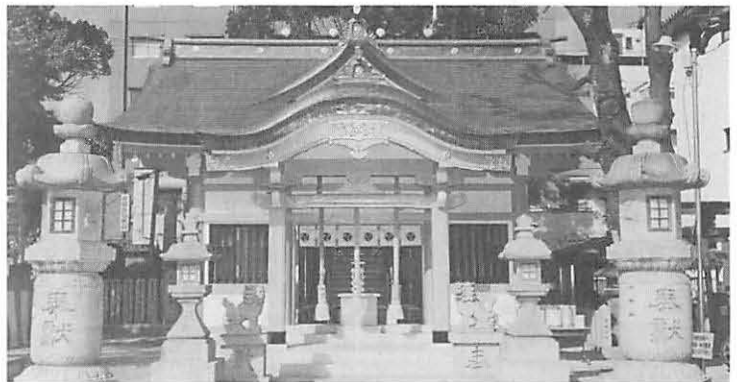
震災前の社殿



震災直後の倒壊した様子

に倒壊し（本殿の瓦葺きの大屋根が落ちて地面にたたきつけられる）、翌月には倒壊し瓦礫と化した社殿を撤去した（なお、中にあった御神体は無事であった）。その後、プレハブの仮設の社殿を建てる一方、地元では社殿復興のための動きを本格化させ、平成一一年九月一二日に大日靈女神社再建委員会が結成され、同委員会の手によって、神社の再建が進められていったのである。

なお、新築再建された社殿は、地震で倒壊した旧社殿より一まわり大きな建物で、床面積が約五八㎡ある。



復興した社殿

## 訂正とおわび

前号（二七号）で次のような訂正がありましたので、おわびいたします。

- ・ 四頁配置図上方の28↓30、29↓28、30↓29
- ・ 六頁下段一六行目「磯野甚右衛門」↓「磯野甚右衛門」
- ・ 六頁下段一七行目「幸左衛門」↓「幸左エ門」
- ・ 六頁下段一八行目「濱屋甚兵衛」↓「濱屋甚兵衛」
- ・ 六頁下段二六行目「金五拾貫」↓「金五拾圓」
- ・ 一〇頁上段三行目「二月八日」↓「四月十八日」

史料館日誌抄

史料館研究員 道谷 卓

平成十一年八月以降

△平成十一年▽

- 10月30日 東灘小学校 三年生(見学者 二十八名)
- 11月6日 東灘歴史掘り起こし隊(見学者 三十四名)
- 11月15日 芦屋市立公民館受講生(見学者 五十名)
- 11月26日 魚崎小学校 四年生(見学者 一七五名)

△平成十二年▽

- 1月21日 魚崎小学校 三年生(見学者 一六〇名)
- 1月27日 西灘小学校 三年生(見学者 四二〇名)
- 1月28日 本山第三小学校 三年生(見学者 八十八名)
- 1月29日 六甲アイランド小学校 三年生(見学者 一三五名)
- 2月3日 福池小学校 三年生(見学者 七十三名)
- 2月2日 本山第一小学校 三年生(見学者 一一七名)
- 2月2日 本山第三小学校 三年生(見学者 八十八名)
- 2月4日 こうべ小学校 三年生(見学者 六十八名)
- 2月5日 御影北小学校 三年生(見学者 一二七名)
- 2月9日 灘小学校 三年生(見学者 五十九名)
- 2月10日 東灘小学校 三年生(見学者 一一四名)
- 3月10日 本山南小学校 三年生(見学者 七十四名)
- 5月23日 芦屋川カレッジ12(見学者 十五名)
- 6月6日 トライやるウィーク・本庄中学校二年生二名を受入れ、二日間に渡り史料館の業務を体験してもらう。
- 7月6日 東灘区役所新規採用職員研修(見学者 四十一名)
- 8月6日 日本民具学会(見学者 十五名)
- 10月27日 神戸商船大学(見学者 一五〇名)
- 11月10日 神戸商船大学(見学者 二五五名)
- 11月20日 芦屋市立公民館受講生(見学者 五十名)
- 12月11日 本山第一小学校 三年生(見学者 二二八名)

△平成十三年▽

- 1月19日 福池小学校 三年生(見学者 八十名)
- 1月25日 こうべ小学校 三年生(見学者 七十四名)
- 1月26日 六甲小学校 三年生(見学者 三十七名)
- 2月1日 芦屋市立岩園小学校 三年生(見学者 九十七名)
- 2月2日 六甲アイランド小学校 三年生(見学者 一一一名)
- 2月3日 西灘小学校 三年生(見学者 七十八名)
- 2月8日 神戸ふれあいウオーキンググループ(見学者 三十七名)
- 本山第三小学校 三年生(見学者 八十九名)

- 2月9日 本山南小学校 三年生(見学者 六十九名)
- 2月15日 御影北小学校 三年生(見学者 一三四名)
- 2月16日 魚崎小学校 三年生(二七六名)
- 2月17日 宮本小学校 三年生(三十二名)
- 2月22日 美野丘小学校 三年生(五十六名)
- 2月23日 灘小学校 三年生(四十七名)
- 2月27日 湊川多聞小学校 三年生(四十三名)
- 3月8日 会下山小学校 三年生(七十名)

資料寄贈者(芳名) (敬称略・一九九六年六月) 以降

△上田酒店▽はかり△藤川祐作▽レジスター、マッチ箱、土鍾△竹中功▽写真(大正時代の本庄小学校など) 3点△八乃生省悟▽古銭6点△長襦袢、髪飾り、キセル、におい袋、くけ台△八北条みち子▽笄、くし、糸巻4点、磁器杖、湯たんぽ、氷囊吊り、桐灰カイロ、氷枕、伸子張、鉄しん棒、ガリ版、鉄筆2点、巻き尺△藤川耕策▽面子11点、飯じやく、火鉢△八芝実實▽堀井式ローラー、しめ機、千歯こぎ、碇子、牛鞍、からさお、もっこ、スケーター、みの、天秤棒、唐箕△八岩本昌三▽感謝状3点△八太田垣正雄▽青木村全図△八阿部英子▽体温計△八今林澄子▽電話機△八岡田堯至▽滑車、コード、碇子、ソケット、電灯一式、屋内配線一部、ゲートル2点△八平野市太郎▽携帯電話△八阿部英子▽電話機△八沖中康人▽テレビ△八荒川政和▽電気釜△八岩本芳太郎▽舵輪△八吉永隆一▽火鉢、たばこ盆付火鉢

『生活文化史』 第28号 01・3・31

編集/道谷 卓  
発行/神戸深江生活文化史料館

〒658-0021 神戸市東灘区深江本町3-5-7  
☎ 078-453-4980 (FAX兼用)